

骨を待つ

福原英信

坑口から見える糸が揺れる。

帰ってきたのか。骨を持ってきたのか。

骨があれば、父がいたと思える。数日後に生まれた遺族は父の温もりを知りたかった、と。

まだ見つからない。海底の地図がまた書き加わる。少しずつ、少しずつ。

作業の合間に、骨が現れた。警察に届けた。人なのかと、刑事に問う。海鳥と分かり、没になる。

待つことが死を活かす。八十年を百年にするために。見つかってないのに、戦争が終わったと思えない。三十年間にかけてきた。

待つ間にも、老いていく。見つかるころには骨かもしれないと遺族はうつむく。

冷たい海の底から出してあげたいとつぶやく。

骨を追いかける人を追いかけるために、髪をとかす。ドライヤーで髪を焦がす。獣毛が焦げたにおいが漂い窓を開ける。ベテラン刑事が、人の燃える匂いが分かれば一人前だと言った。夜中の警察署は蛍光灯が切れそうだった。

爪が伸びていたので切って、ゴミ箱に捨てて、出かけた。